

## 水平表現としての上下のメタファーについて\*

山 添 秀 剛

---

### 要 約

本論は、an *up/ down train* (上り／下り列車) のように水平を垂直で理解する奇妙な「上下のメタファー」について考察する。まず、水平軸に比べ垂直軸が我々にとって優位であることを「上下のメタファー」の観点から概観し、水平を垂直で捉えるメタファーが「上下のメタファー」のカテゴリー内でどのように位置づけられるかを確認する。次に、先行研究としてLindner (1981) と瀬戸 (1995) を取り上げ、その意義と問題点を指摘する。それを踏まえ、他の実例も併せて考察した上で、本論の立場を明らかにしたい。

キーワード：上下のメタファー、概念メタファー、メタファー表現、「着点への接近」を表す *up*、投射認識、投射表現、価値、異領域写像、同領域写像

### 1 はじめに

我々は空間の中で生きる存在である。空間を把握する際に重要な基準は、前後・左右・上下の方向性だろう。しかし、無重力でない世界だけに、この3者の方向性は我々にとり対等な関係ではなさそうである。

その理由の一端として、水平方向に広がる外界では、「立つ」ものあるいは「起きる」ものの方が、「座る」ものもしくは「寝る」ものよりも人目をひくことが考えられよう。この点は「目立つ」(*stand out*) という表現に象徴的である。上下に伸びるものは「目に立つ」(*outstanding*) からこそ「目をひく」(*clearly noticeable*) わけである。<sup>(1)</sup> どうやら我々の視覚器官は、上下に鋭敏なようだ。<sup>(2)</sup> またその結果、日本語や英語とは異なり、前後・左右という相対的な空間認識の仕組みを採用しない言語も多数存在するにも関わらず、<sup>(3)</sup> 言語類型論的には上下に関する語彙はほぼ普遍的に存在する(と想定できる)こと、<sup>(4)</sup> などが挙げられよう。前後、左右に比べて、上下の方向性は特別な地位が得られそうである。

上下の認識が我々にとって重要であることは、語の意味の広がりからも分かる。(1)を見よう。

(1) a. a *high fence* / a *low fence*

- b. an *up* escalator / a *down* escalator
- c. Put your hand *up*. / Put your hand *down*.
- d. The curtain *rose*. / The curtain *fell*.

(1) は、上下に関する表現が文字通りに空間の意味として用いられる例である。空間における上下軸に基づき「高い／低い」「上りの／下りの」「上へ／下へ」「上る／落ちる」を表す。

他方、次の(2)は、(1)と同じ垂直表現が用いられるものの比喩的な意味を表す。

- (2) a. *high* quality / *low* quality
- b. *high* blood pressure / *low* blood pressure
- c. I feel a bit *up* today. / I feel a bit *down* today.
- d. He *rose* to power. / He *fell* from power.

上下のメタファーに関する研究としては、特にLakoff and Johnson (1980:14-21) やTaylor (2003:136-138) などが重要である。これらの研究を参考にして、(2) について確認しよう。

まず、*high* / *low*の事例から。(2a) を和訳すれば「高品質／低品質」となり、日英語で対応する。この表現の背後には「良は上」(GOOD IS UP) と「悪は下」(BAD IS DOWN) のメタファーによる認識が窺われる。他方、(2b) は「高血圧／低血圧」となり、やはり日英語で対応する。血流の内圧量を上下に見立てる。ここには「多は上」(MORE IS UP) と「少は下」(LESS IS DOWN) という捉え方がある。<sup>(5)</sup>

次に、*up* / *down*。(2c) の和訳は「今日はちょっと気分がいい／今日はちょっと気分が悪い」くらいで、この場合きれいな直訳になりづらい。しかし、「気分上々／気分沈鬱」などの類義表現も併せて考えれば、上下になぞらえる認識は日英で共通することが分かる。「幸せは上」(HAPPY IS UP) と「悲しみは下」(SAD IS DOWN) の概念メタファーが想定できるだろう。この認識は、心理領域に限定せず広く捉えれば、(2a) で見た「良は上」(GOOD IS UP) と「悪は下」(BAD IS DOWN) に含めていいかもしれない。

最後に、*rise* / *fall*。(2d) は「彼は権力の座に上った／彼は権力の座から落ちた」を意味し、日英対応する。「権力が多いのは上」(MORE POWER IS UP) と「権力が少ないのは下」(LESS POWER IS DOWN) という認識が背後にある。権力が量的に概念化できるとすれば (cf. America has a lot of power.), この概念メタファーは(2b) で見た「多は上」(MORE IS UP) と「少は下」(LESS IS DOWN) の一種と考えてもいいかもしれない。

これらはほんの一例だが、上記のように上下を表す表現群は文字通りの意味の世界にとどまらない。空間の意味からメタファー拡張を経て「ものの良し悪し」や「量の多少」などの他領域にも広く使用されることが分かる。上下の認識は、様々な他の領域を理解する際の前提なのだ。上

下軸の重要さが窺い知れるだろう。

そこで、(3)を見よう。ここにも上下を表す表現 *up / down* が登場する。

### (3) an *up* train / a *down* train

(3)は「上り列車／下り列車」となり、日英語で対応する。(2)の場合と同様に、この *up / down* も、もはや文字通りの意味ではない。「上り坂」のように徐々に高い地点へ上って行く列車でも、「下り坂」のように徐々に低い地点へ下って行く列車でもないからである。文字通りでなければ、比喩的な処理が関わると考えられるだろう。この場合もメタファーが関わる。

興味深いことにこのメタファーは特殊と言えるだろう。なぜなら通常の典型的なメタファーが起点領域から目標領域への写像において具象領域が抽象領域に一定の構造を与える、という考え方とずれるからである。すなわち、抽象的で分かりにくいことを具体的に分かりやすいものに喩えて理解するところにメタファーの威力があるにもかかわらず、(3)は、水平を垂直で、前後を上下で捉える。すなわち、起点領域も目標領域もともに空間領域であり、空間を空間に、具象を具象に喩えて理解する。これはメタファーのカテゴリーからすれば周延的な事例と言えよう。

水平を垂直で理解する、このような奇妙なメタファーについて、関連する先行研究を以下で見よう。

## 2 先行研究

前節(3)のような特殊なメタファー表現に関連する研究をふたつ取り上げる。ひとつは、「動詞＋不変化詞」構文、いわゆる句動詞を構成する *up* の多義性を考察した Lindner (1981)。もうひとつは、空間のメタファーを重点的に考察する瀬戸 (1995) である。

### 2.1 着点への接近を表す *UP*

Lindner (1981) の *out* と *up* の研究は、Brugman (1981) の *over* の研究とならび、認知言語学の知見を利用した先駆的研究であり、多義語の分析を一気に加速させた点で重要である。本論との関連で言えば、Lindner (1981) の *up* に関する観察が重要である。以下で確認しよう。

次の(4)はいずれも不変化詞 *up* を含む句動詞の例文である。

(4) a. The rocket shot *up*. (Lindner 1981: 113)

b. He walked/ rushed/ came *up* and said hello. (Lindner 1981: 139)

形式上は似ているが、(4a) の *up* が「垂直方向」を表すのに対して、(4b) は「着点への接近」を表すという違いがある。Lindner (1981) は、(4a) のような事例が *up* のプロトタイプ・カテゴリー内での典型例であり、この意義を UP-1 (“Vertical” UP) とした。また、(4b) のような事例は、着点への接近という有界な運動を表す点で、方向を非有界に捉える UP-1 とは区別されるとし、UP-2 (“Goal-Oriented” UP) と別意義にした。

加えて、UP-2の類例として下記を挙げる。

- (5) a. They're closing *up* on us.  
 b. The guard bodied *up* to his opponent.  
 c. The car drew/ pulled *up* and someone got out.  
 d. Try to catch *up* and then keep *up* with him.  
 e. The kitty cuddled/ snuggled *up* to me.  
 f. Step right *up*/ roll on *up* and see the show!  
 g. He sidled *up* to me and whispered in my ear.  
 h. Don't sneak *up* on me like that!  
 i. Belly *up* to the bar!  
 j. Move your chair *up* closer.  
 k. He inched his way *up* in line.  
 l. He moved *up* to the end of the line. (Lindner 1981: 141)

(5) はいずれも主語 (TR) が着点 (LM) へ近づくことを意味する。着点は、話者もしくは場所であり、toに代表される前置詞句で明示されることもあれば、文脈から省略されることもあるという。

Lindner (1981: 139-140) によれば、「垂直方向」を表す UP-1 と「着点への接近」を表す UP-2 の関係は、別個の意義としながらも、連続的な関係上の両極とし、*up*らしさからすれば UP-2 の方が典型性は下がるという。また、両意義はともに物理的領域に属するものの、UP-1は垂直軸と水平軸を前提とする (oriented physical space) のに対して、UP-2はそのような方向軸を前提としない (non-oriented physical space)。さらに、両意義を結びつける可能性として、家族的類似性 (family remembrances) を示唆する。

## 2.2 投射認識による投射表現

筆者の知る限り、1節の(3)のような表現を比較的大きく取り上げ考察する研究は瀬戸 (1995: 252-269) 以外に見当たらない。瀬戸 (1995) は、水平概念を垂直概念で理解することを「投射認識」<sup>(6)</sup> と呼び、その認識に基づくメタファー表現を「投射表現」と言う。

投射認識の代表例は、道路標識のうちの案内標識だろう。青色の背景に白抜きで垂直上向きの矢印が描かれているおなじみのものだ。矢印は1本のことでもあれば、左右に分かれ3本の場合もある。例えば、矢印が垂直上向きに1本のタイプで、その矢印の横に「札幌駅 15km」とあれば、どう理解するだろうか。ふつうは、この道をこのまま15km直進すれば札幌駅にたどり着く、と理解する。矢印が垂直方向に真上を指すからと言って、決して上空15kmに札幌駅が空中浮遊していると文字通りに解釈することはない。このようなありふれた日常経験にもメタファー認識が息づく。ここには水平のことに垂直のことに持ち出して理解するという認識が働く。

投射認識は言語にも反映する。瀬戸 (1995 : 254) の投射理論で重要なのは、投射認識が反映する投射表現のパターンが2種に限定される点である。日英語を中心に様々な投射表現を論じている瀬戸 (1995) の中から英語の実例 (と、本文にある場合はその和訳) を取り上げ、投射表現のふたつのパターンを以下で確認しよう。

まず、ひとつ目のパターンである「プラスの価値を担う『上』が、同じくプラスの価値を担う『前』に投射される場合」(瀬戸 1995 : 254) から見よう。瀬戸 (1995 : 261-263) によれば、(3) と同様に (6) も、「『上』が水平面の価値の中心 (……) に近づき、『下』がその逆である」ことを示す事例だという。

- (6) a. go up to London  
 b. go up to one's university  
 c. fly up to Scotland from London (飛行機でロンドンからスコットランドへ行く)  
 d. drive up from Los Angeles to San Francisco(車でロサンゼルスからサンフランシスコへ行く)

(6a) や (6b) の up は「価値の中心への接近」を表す。(6a) は首都ロンドン、(6b) は大学が価値の中心をなす。日本語との平行性も「上京」や「登校」などに見て取れるという。また、(6c) や (6d) の up は、都市の地理関係から分かるように、「北」を表す。なぜ「北」が「上」と結びつくのかについては、「やや微妙な問題」としながらも、京都の御所を中心とする歴史的な都市構造や近世以降の世界地図の観点から、「北の方角が価値の中心と結び付く」可能性を示唆する。

(7) と (8) は、身体の「上」部に位置する「頭」が「前」に投射される事例である(瀬戸 1995 : 259-260)。

- (7) a. ahead (前方へ)  
 b. the head of the parade (パレードの先頭)  
 c. sit at the head of the table (食卓の上座につく)

(7a) の ahead の接頭辞 a- は、aside や ashore と同じく、「～の方へ」(to, towards) を表す。よっ

て、ahead全体で「頭の方へ」となり、これが投射表現に転じて「前方へ」を意味する。残りは名詞headそのものの例。(7b)のheadは「先頭」、(7c)の場合は「上座」と、日英語で投射認識が対応する。次の(8)もheadを含む語句の類例である。

- (8) a. *headmost* (先頭の, もっとも進んだ)  
 b. *head-on* (正面衝突の, まっこうからの)  
 c. *bridgehead* (橋頭堡)  
 d. *headway* (前進, 進歩)

食卓における「上座」がheadで表せることを見たが、次の(9)は構造上きれいに日本語の「上座」と対応する(瀬戸 1995: 263)。

- (9) the *top* [*highest, upper*] seat (上座)

これらはいずれも「上」が「水平面における価値の中心に近づく」ことを表す例となる。

では次に、ふたつ目のパターンである「マイナスの価値を担う『下』」が、同じくマイナスの価値を担う『後』に投射される場合(瀬戸 1995: 254)を確認しよう。瀬戸(1995: 264)によれば、(10)は「価値の中心からもっとも遠い平面」を表すという。

- (10) a. sit at the *bottom* of the table (食卓の末席につく)  
 b. the *bottom* of the road (通りの向う端, 行き当たり)  
 c. the *bottom* of our garden (庭の奥)

これらは、垂直軸で「下」に位置する「底」が水平面での「後(末, 端, 奥)」に投射される。次の(11)も類例(瀬戸 1995: 259)。

- (11) a. *fall out* (落後する)  
 b. *fall behind* (人後に落ちる)  
 c. *drop out* (落後する, 中退する)  
 d. He *dropped* behind early in the marathon. (マラソンで彼は早々と脱落した)

確かに「落ちる」という垂直概念で「(競争等で)後れをとる」という水平概念を理解しているのが分かる。(10)や(11)は「下」が「水平面における価値の中心から遠ざかる」ことを表す例となる。

### 3 考察

前節では、水平を垂直で理解する特殊な空間のメタファーについての先行研究を概観した。これを踏まえ、本節ではこの特異な空間のメタファーに関してさらに考察を加える。その前に、前節で見た先行研究の意義と問題点について確認しておこう。

#### 3.1 先行研究の意義と問題点

Lindner (1981) の *up* を伴う句動詞の研究の中で特に興味深かったのは、次の2点である。㉠(4b) のような *up* を「着点への接近」を表す“Goal-Oriented” UP と別意義に認定したこと。㉡中心義“Vertical” UP との関係として、両意義は物理的つまり空間領域に属するとしながらも、家族的類似性を示唆した点。

(4) b. He walked/ rushed/ came *up* and said hello. (Lindner 1981: 139)

また、瀬戸 (1995) の投射認識に基づいた投射表現に関する分析の中で注目すべきポイントは、次の3点と言える。㉢水平を垂直でメタファー認識することに着目し、この認識の仕組み(投射認識)とそれを反映する表現(投射表現)に注目したこと。㉣プラスの価値を担う「上」は「前」に投射され、マイナスの価値を担う「下」は「後」に投射される点。㉤「上」が水平面の価値の中心に近づき(例えば、(6a))、「下」が価値の中心から遠ざかる(例えば、(11d)) こと。

(6) a. go *up* to London

(11) d. He *dropped* behind early in the marathon. (マラソンで彼は早々と脱落した)

Lindner (1981) が控えめながらも言及した要点㉡について、瀬戸 (1995) は上下のメタファーの分析に投射認識という新たな視点を加え、㉢の事実を明らかにした。また、㉠のように Lindner (1981) が認定した「着点への接近」を表す意義(“Goal-Oriented” UP) の「着点」を、瀬戸 (1995) は前提㉣の帰結㉤を導く中で「価値の中心」だと断じた。これで、水平を垂直で理解する空間のメタファーの存在が浮き彫りとなった。その意味で両者の研究の功績は大きい。

しかしながら、この特殊なメタファーに関しては依然として疑問が残る。その疑問は突き詰めれば、次のようになる。果たして「着点への接近」を表す *up* の「着点」とは「価値の中心」だけなのか。この問いについて以下で例文とともに考えよう。

2.2節で、(6a) や (6b) の *up* は前置詞 *to* が示す「着点」——首都や大学——に近づくことを表し、この「着点」が「価値の中心」だということを見た。確かに、首都は国民にとって、大学は学生にとって「価値の中心」と言えるかもしれない。

- (6) a. go *up* to London  
 b. go *up* to one's university

実際, (6a) のような「上京」を表す例文について, LDOCE<sup>(7)</sup> は以下のように「価値 (の中心)」の観点から意義を記述する。

- (12) *up*<sup>1</sup> *adv, prep, adj*

7 TO MORE IMPORTANT PLACE used to show that the place someone goes to is more important than the place they start from: Have you been *up* to London recently?

これに対し, 「価値の中心」たる首都や大学から遠ざかる場合は, (13) のように言える。<sup>(8)</sup> 両例とも Google から。

- (13) a. go *down* from London  
 b. go *down* from a university

NODE は, それぞれの *down* の意義を (13a) が “《Brit.》 away from the capital or major city” と, (13b) が “《Brit.》 away from a university, especially Oxford or Cambridge” と記述する。それぞれの全体の意味は「ロンドンから離れる」「大学から離れる」となる。

同様の趣旨のことは, *up* が副詞から形容詞へと品詞を変えても言えそうである。

- (3) an *up* train / a *down* train

- (14) a. the *up* line / the *down* line (上り線/下り線)

- b. the *up* platform / the *down* platform (上りのプラットフォーム/下りのプラットフォーム)

なるほど, (3) の「上り列車」は「価値の中心」へ向かう, すなわち新幹線なら東京へ, あるいは在来線なら札幌などの主要都市へ。「下り列車」はその逆で「価値の中心」から遠ざかる。(14) も類例である。

しかし, すでに見ているが, 次の例はどうであろうか。すべて「動詞 + *up* + to + 着点」という構造を含むが, これらの例の「着点」は実際「価値の中心」と言えるであろうか。

- (5) b. The guard bodied *up* to his opponent.<sup>(9)</sup>  
 g. He sidled *up* to me and whispered in my ear.  
 i. Belly *up* to the bar!



1. He moved *up* to the end of the line. (Lindner 1981: 141)

それぞれの「着点」は, (5b) が「相手選手」, (5g) が「私」, (5i) が「カウンター」, (5l) が「列の端」である。すべてそれぞれの「着点」に近づくことを表すが, いかにも想像力を逞しくしてもこれらの「着点」が「価値の中心」だとするのは言い過ぎであろう。これらが国民にとっての「首都」や学生にとっての「大学」と対等の地位にあるとは考えにくい。

この手の例は, 辞書にも散見される。(15a) と (15b) はイギリス系, (15c) と (15d) はアメリカ系の学習英英辞典からの例文である。

- (15) a. Carrying a gun, he walked *up* to the cashier and demanded money. (CIDE)  
 b. She went straight *up* to the door and knocked loudly. (OALD)  
 c. Two women ran *up* to us, shouting in Spanish. (Macmillan)  
 d. I walked *up* to him and said "hello." (LAAD)

さらに, (16) の例はどうだろうか。

- (16) a. *upriver* / *downriver* <sup>(10)</sup> (川上へ／川下へ)  
 b. *upstream* / *downstream* (上流へ／下流へ)  
 c. *upcountry* / *downcountry* (内陸へ／平野へ)  
 d. *uptown* / *downtown* (住宅街へ／中心街へ)  
 e. *upstage* / *downstage* <sup>(11)</sup> (舞台後方へ／舞台前方へ)  
 f. *upwind* / *downwind* (風上へ／風下へ)

(16a) と (16b) は, 高い位置から低い位置へ川の水が流れることを考えれば, 文字通りの表現と言える。(16c) と (16d) にもまだ高低差が感じられるかもしれないが, 徐々にメタファーに近づく気配。そして, (16e) と (16f) は完全に上下のメタファーと言えそうだ。であれば, これらは投射表現ということになるが, 瀬戸 (1995) の考えだと, 「舞台後方」や「風上」が「価値の中心」になってしまう。

また, 2. 2 節で「北の方角が価値の中心と結び付く」可能性を瀬戸 (1995: 261-263) が示唆したことを見たが, 果たしてそうなのだろうか。

- (6) c. fly *up* to Scotland from London (飛行機でロンドンからスコットランドへ行く)  
 d. drive *up* from Los Angeles to San Francisco (車でロサンゼルスからサンフランシスコへ行く)

もしそうであれば, (6c) ではより北に位置するスコットランドの方がロンドンよりも価値があり, (6d) ではサンフランシスコの方がロサンゼルスよりも価値があることになる。また, (17) のように南下ルートをとる場合でも, 同様であろう。例はGoogleから。

- (17) a. fly *down* to London from Scotland  
 b. drive *down* from San Francisco to Los Angeles

しかし, (6c, d) や (17) には, それぞれ北に位置するスコットランドとサンフランシスコの方に価値があるというニュアンスは感じられない。

この点は, 様々な辞書でも確認できる。実際, 意義の説明で「価値(の中心)」に触れることはなく, 単に「北」もしくは「南」への方向性を示すにすぎない。例としてLDOCEのupとdownの記述を挙げておく。

- (18) a. up<sup>1</sup> *adv. prep. adj* 5 NORTH in or towards the north:  
 We're driving *up* to Chicago for the conference.  
 b. down<sup>2</sup> *adv. prep. adj* 5 SOUTH in or towards the south:  
 They drove all the way *down* from Boston to Miami.

この記述は, 先に見た「上京」を表す(6a)の例文の意義を記述する(12)と対照的であろう。「上京」のupは「価値(の中心)」の観点から説明できても, 「北上」のupはそうはいかない。downの場合も同様の趣旨の説明が可能であろう。

さらに, 類例として下記を見よう。(19)も(20)もBNCから。

- (19) a. New York's *Upper* East Side / New York's *Lower* East Side  
 (ニューヨークの北東部/南東部)  
 b. the moor *above* the town / the river *below* the town  
 (町の北にある湿原/町の南にある川)

(19)の事例も単に「上」「下」の垂直軸で「北」「南」の方向性を表すにすぎず, 必ずしも「北」が「価値の中心」とはみなせないだろう。

(20)はもはや「上」「下」で「北」「南」すら表さない。

- (20) a. *high* latitudes / *low* latitudes (高緯度地帯/低緯度地帯)  
 b. see *above* / see *below* (上記参照/下記参照)

(20a) は、北半球か南半球かによって方向性が相対的に変わるため、「高」緯度地帯が「北」方だと固定できない。(20b) は、書籍などのページを「東西南北」の方向性で表す慣習は日英語にはなく、また本を立てて読むこともあるからか、横書きで「行」の方向性には文字通り「左右」を用いるものの、「列」の方向性には文字通りの表現(で)はなく投射表現としての「上下」を使う。これらの例には、完全に「価値の中心」は想定できないだろう。

最後に、瀬戸(1995: 259-260)が挙げた the head of the X と the bottom of the X やそれに類する事例も見ておこう。2.2節で見た例を再掲する。

(7) b. the *head* of the parade (パレードの先頭)

c. sit at the *head* of the table (食卓の上座につく)

なるほど、(7c)の head (上座)は食卓における「価値の中心」とみなせる。しかし、(7b)の head (先頭)はパレードにおける「価値の中心」だろうか。

加えて、(10)は瀬戸(1995: 264)の考えだと「価値の中心」から外れた場所になる。

(10) a. sit at the *bottom* of the table (食卓の末席につく)

b. the *bottom* of the road (通りの向う端、行き当たり)

c. the *bottom* of our garden (庭の奥)

なるほどまだ(10a)は「価値の中心」との関係で理解できそう。食卓における「価値の中心」は「上座」と言え、そこから遠く離れるのが「末席」という具合だろう。しかし、道路や庭の「価値の中心」とはどこなのだろうか。分かりにくい。

そこで、上下の投射表現を対比してみよう。下記の類例(21)はすべてBNCから。

(21) a. the *head* of the bed / the *foot* of the bed (ベッドの枕元/足元)

b. the *head* of the lake / the *foot* of the lake (湖の水源/奥)

c. the *top* of the road / the *bottom* of the road (道路の突き当り/はずれ)

d. the *top* of the page / the *bottom* of the page (ページの上部/下部)

これらが「価値の中心」という考え方を使得扱うべきか否かは、これ以上説明は不要だろう。どうやらすべての投射表現を「価値の中心」の観点から説明することは難しいようだ。

### 3.2 「問題点」の克服

3.1節で見たように、どうやら投射表現には、瀬戸（1995）が想定する「価値の中心」という概念と関わりのない事例も存在するようである。この問題を解決する糸口は、実は瀬戸（1995: 223-239）そのものにあると筆者は考える。結論から言えば、瀬戸（1995）が提案する上下のメタファーの分類法における理論的な不整合を修復すればよい。

その前にまず、瀬戸（1995）による上下のメタファーの分類法を概観し、その問題点を確認しよう。例は英語のみを上下につきひとつずつ引用するにとどめる。

- (22) a. 価値自由： *raise one's voice / drop one's voice* <sup>(12)</sup>  
 b. 価値拘束（プラス）： *the hotel's high standards / get married and settle down*  
 c. 価値拘束（マイナス）： *high-handed attitudes / people of low birth*  
 d. 投射： *come up to London / drop out*

(22) のように、瀬戸（1995:223-239）は上下のメタファーを4分類する。(22a)の価値自由とは、「価値に関して自由な（中立的な）表現」(*ibid.*, p. 228)である。「声を上げる」のも「声を落とす」のも表現に上下軸が用いられるが、価値の問題は入り込まない。「速度・物価が上がる／下がる」なども同様である。これに対して、(22b)と(22c)は、価値の問題となる。(22b)の「高水準」「落ち着く」はプラス価値、(22c)の「高圧的な態度」「身分の低い生まれ」はマイナス価値を帯びると言えよう。これら三者にさらに(22d)の投射表現が加わるといふ。

ここで、それぞれの起点領域と目標領域の関係も併せて確認しておこう。想定される写像関係、すなわち概念メタファーは(23)の通り。

- (23) a. 価値自由： 「多は上」(MORE IS UP) / 「少は下」(LESS IS DOWN)  
 b. 価値拘束（プラス）： 「良は上」(GOOD IS UP) / 「良は下」(GOOD IS DOWN)  
 c. 価値拘束（マイナス）： 「悪は上」(BAD IS UP) / 「悪は下」(BAD IS DOWN)  
 d. 投射： 「前は上」(FRONT IS UP) / 「後は下」(BACK IS DOWN)

確かに、上下のメタファーを価値自由・価値拘束（プラス、マイナス）・投射と3分類するのは、大きな方向性としては間違っていないかもしれない。しかし、この分類は粗すぎるようである。筆者はこれら三者の並列に違和感を覚える。というのも、その内部構造に大きな溝があるからだ。その根拠をふたつ確認しよう。

ひとつ目は、目標領域の質的な差である。(23a-c)は空間領域から抽象領域への写像であり、典型的なメタファーと言えそうである。これに対して、(23d)は空間領域から空間領域への写像であり、理解する対象たる目標領域も空間領域という、メタファーらしからぬ特殊なケースと

言える。この点から (23d) の投射表現だけは異質という印象を受ける。

もうひとつは、価値自由・価値拘束・投射という並列概念に関する質的な差だ。瀬戸 (1995) では、2.2 節で見たように、投射表現の場合は暗黙のうちに「価値拘束」が前提になる。しかし、実際は、3.1 節で見たように、投射表現においても「価値自由」のパターンが存在する。であれば、当初の分類は、価値自由・価値拘束 (プラス, マイナス)・投射 (価値自由, 価値拘束) と並列概念のレベルが錯綜し、分類の意味をなさなくなってしまう。

この問題を解決するために、事例の状況から、価値自由・価値拘束・投射というレベルの 3 並列をやめて論じる必要性が見えてくるだろう。本論では、以下のように考えたい。

(24) 〈異領域写像〉上下メタファー

- a. 価値自由： 「多は上」 (MORE IS UP) / 「少は下」 (LESS IS DOWN)  
*raise one's voice*                      *drop one's voice*
- b. 価値拘束 (プラス)： 「良は上」 (GOOD IS UP) / 「良は下」 (GOOD IS DOWN)  
 the hotel's *high* standards              get married and settle *down*
- c. 価値拘束 (マイナス)： 「悪は上」 (BAD IS UP) / 「悪は下」 (BAD IS DOWN)  
*high-handed attitudes*                      people of *low* birth

(25) 〈同領域写像〉上下メタファー = 投射表現

- a. 価値自由： 「水平は垂直」 (HORIZONTAL IS VERTICAL)  
 go straight *up* to the door  
 fly *up* to Scotland from London/ fly *down* to London from Scotland  
 the *top/ bottom* of the road (page)  
*high/ low* latitudes
- b. 価値拘束： 「前は上」 (FRONT IS UP) / 「後は下」 (BACK IS DOWN) <sup>(13)</sup>  
 go *up* to London                              *drop out*  
 the *head* of the table                              the *bottom* of the table

まず、「上下のメタファー」について、空間領域から抽象領域への写像による一般的・典型的なケースを (24) 「〈異領域写像〉上下メタファー」とし、空間領域から空間領域への写像という特殊な投射表現を (25) 「〈同領域写像〉<sup>(14)</sup> 上下メタファー」と大別する。次に、(24) の「〈異領域写像〉上下メタファー」と同様に、(25) の「投射表現」にも、価値を帯びない場合 (価値自由 (25a)) と帯びる場合 (価値拘束 (25b)) を峻別する。<sup>(15)</sup> (24) と (25) の関係は、両者とも空間概念である「上下の方向性」からのメタファー拡張だが、両者を包含する「上下のメタファー」のプロトタイプ・カテゴリー内ではそれぞれ中心と周辺に位置づくだろう。また、(24) と (25)

それぞれの内部カテゴリーは「価値」との関係で大きく二分されることになる。このように分類すれば、事例の状況をより正確に反映するだろう。

最後に、(25) について2点ほど考察しておきたい。ひとつは、価値拘束における価値の源泉について。もうひとつは、価値自由と価値拘束それぞれの写像関係について。

まず、価値拘束における価値の源泉について考えてみたい。上下のメタファーは、一般的な(24)であろうが、特殊な(25)であろうが、価値を帯びない場合と帯びる場合に大別できた。この差は一体何に由来するのだろうか。(24) の「〈異領域写像〉上下メタファー」も併せて取り上げ、その目標領域の概念内容に注目しよう。

文字通りの「上」「下」は元来価値について中立だ。空間領域において「エレベーター」が「上がる／下がる」ことは価値とは何ら関係しない。ここから(24) のようにメタファー拡張が生じると、「物価が上がる／下がる」などのように価値を帯びない場合<sup>(16)</sup>と「成績が上がる／下がる」などのように価値を帯びる場合に分かれる。前者の目標領域は「市場における価格の変動」、後者は「評価における成績の変化」を表す。ということは、価値の源泉は、起点領域たる「空間における上下運動」にはなく、目標領域の概念内容にありそうだ。つまり、もともと価値に中立的な「空間における上下運動」を表す「上がる／下がる」が「市場における価格の変動」にメタファー写像した場合は、目標領域の概念内容たる「価格」が固有の価値とは関わらないため、価値に拘束されない。他方、「上がる／下がる」が「評価における成績の変化」にメタファー写像した場合は、「成績」は固有の価値と関わるため、価値に拘束されるわけである。

この論点は(25) の「投射表現」にも当てはまる。やはり「ページの上／下部」などのように価値を帯びない場合と「食卓の上座／末席」などのように価値を帯びる場合に分かれる。前者は、目標領域の概念内容たる「ページ(内の場所)」が固有の価値とは関わらないため、価値に拘束されない。他方、後者の「食卓(を囲む座席の位置)」は固有の価値と関わるため、価値に拘束されるわけである。

以上、「上下のメタファー」における(24b, c) と(25b) の価値の源泉は、目標領域に内在する固有の価値<sup>(17)</sup>に起因すると結論づけられるであろう。

もうひとつ、投射表現における価値自由と価値拘束それぞれの写像関係についても確認したい。(25b) の「価値拘束」の場合、水平を垂直で理解する際、「前」を価値の中心たる「上」に喩え、「後」を価値の周辺たる「下」に喩える。確かに、go up to London (上京する), drop out (落後する), the head/ bottom of the table (食卓の上座／末席) などの例には、認識主体の視点が介在し、「前は上」(FRONT IS UP) および「後は下」(BACK IS DOWN) の認識が息づく。

これに対して、(25a) の場合はどうだろうか。go straight up to the door (ドアに真っ直ぐ近づく), fly up to Scotland from London (飛行機でロンドンからスコットランドへ行く) / fly down to London from Scotland (飛行機でスコットランドからロンドンへ行く), the top/ bottom of the road (道路の突き当たり／はずれ), the top/ bottom of the page (ページの上／下部), high/

*low latitudes* (高/低緯度地帯)などは、その和訳からも分かるように、「前は上」および「後は下」の対応が見えにくい。つまり、水平を垂直で理解する時に、垂直軸の上下が常に水平面の前後と対応するわけではなさそうである。(25b)のように目標領域たる水平領域に「前」「後」の概念が初めから刻印されている場合<sup>(18)</sup>と(25a)のようにそうではない場合があることになる。

この点は、LDOCEのupの記述とも通じる。

(26) up<sup>1</sup> *adv, prep, adj*

4 **ALONG** in or to a place that is further along something such as a road or path **SYN** down:  
She lives just *up* the street. | We walked *up* the road towards the church.

前置詞upが(26)のような意義の場合は、ほぼalongと似た意味であり、興味深いことに、通常は反意語のdownと同義語だということ。ということは、(26)の例文をdownに置き換えても意味に大差はないということになる。これが意味するところは、「通りに沿って進んだ場所」が「前」なのか「後」なのか定かでない、ということだろう。むしろこの場合、何かを基準に「前後」を定めることは意味がないのだろう。

だから、次の(27)のイディオムup and downの記述も、upがbackwardsと、downがforwardsと対応するなどということではなく、上下と前後の対応は消失していると考えた方がよさそうである。(27)は同じくLDOCEから。

(27) up<sup>1</sup> *adv, prep, adj*

17 **up and down** a) backwards and forwards:

Ralph paced *up and down* the room, looking worried.

ラルフが心配そうにうろつく際の方向性など問題にしていないのだ。

このようなタイプは、ただ大きく水平を垂直で認識するにとどまっているのである。つまり、写像関係は「水平は垂直」(HORIZONTAL IS VERTICAL)ということになろう。(25a)と(25b)はスキーマのレベルが異なると言ってもいいかもしれない。

## 4 結論

本論は、水平を垂直で捉える「上下のメタファー」について論じた。一般的な「上下のメタファー」(すなわち「〈異領域写像〉上下メタファー」)は起点領域たる空間領域で目標領域たる抽象領域を理解するのに対して、「投射表現」(すなわち「〈同領域写像〉上下メタファー」)は起点領域も目標領域もともに空間領域という特異なメタファーであるため、「上下のメタファー」の

中では特殊なメタファーとして峻別することを提案した。また、「〈異領域写像〉上下メタファー」だけでなく投射表現たる「〈同領域写像〉上下メタファー」にも価値に拘束されない事例が存在することを明らかにした。

## 注

- \* 草稿の段階で同僚の水鳥梨紗氏から貴重なご意見を頂いた。心より御礼申し上げます。もちろん、本稿の不備はすべて筆者の責任である。
- (1) 瀬戸 (1995) の pp. 123-129 を参照。
  - (2) 例えば、内川 (2000) の p. 61 や p. 79 などには、一次視覚野や二次視覚野において、垂直 (に近い) スリットもしくは線分によく反応するニューロンが存在するという実験結果が紹介されている。
  - (3) 例えば、井上 (1998) の pp. 4-92 を参照。
  - (4) 例えば、Wierzbicka (1996) は、意味原素 (semantic primitives) を提案する。意味原素とは、これ以上還元不可能な意味の普遍的単位。彼女のリストには、上下にあたる ABOVE と UNDER はあるが、前後や左右に相当するものはない。
  - (5) 一見すると、「血圧」も「品質」と同様に、良い悪いという価値判断が認識に入り込む余地がありそうだが、そうではない。これは言葉の背後にある認識の問題ではなく庶民感覚の問題だ (庶民感覚では「高血圧」も「低血圧」もともに健康には良くないが)。「品質」には語そのものに「価値」の問題が固定的に組み込まれる。その「優劣」を「上下」軸を使って認識する。すなわち、「良い」品質は「高」品質として、「悪い」品質は「低」品質として理解される。他方、「血圧」の場合は、語に内在するのは「価値」の問題ではなく、単に血流の内圧「量」の増減の問題にすぎない。よって、血流の内圧量が「多い」場合は「高」血圧として、「少ない」場合は「低」血圧として理解される。この点は、「高/低品質」のことを「良い/悪い品質」と言っても、決して「高/低血圧」のことをそれぞれ「良い/悪い血圧」とは言えないことから分かる。
  - (6) 瀬戸 (1995) の「投射認識」は、佐藤 (1993: 175) の「水平面の現象を垂直面に翻案する記号において、私たちは、前進することを、上昇することによって表現するくせがある」という見方と通ずる。
  - (7) 辞書やコーパス等の名称には略語を用いる。正式名称との対応は、末尾「辞書・事典」を参照。
  - (8) もちろん (13) は後で見ると文脈によりそれぞれ「ロンドンから南に行く」「大学から南に行く」という「南下」の意味にもなる。同様に、(6a) と (6b) は「ロンドンへと北に行く」「大学へと北に行く」という「北上」の意味にもなる。
  - (9) Lindner (1981: 141) には、この例文だけ注釈 ('defend closely in basketball') がある。それを見ると、この例文の意味は「(バスケの) ガードが (ディフェンスのために) 相手選手に体を寄せた」くらいであろう。
  - (10) 類例に、the upper Amazon / the lower Amazon (アマゾン川上流/アマゾン川下流) や、ナイル川との関係で Upper Egypt / Lower Egypt (上エジプト/下エジプト) が挙げられる。
  - (11) NEB によると、ルネサンス期に絵画で流行した遠近法が演劇の舞台設計にも利用され、床が奥へと上向きに傾斜をつけた舞台も現れたようである。とくにバロック時代にヨーロッパに広まり、英国の劇場の舞台にも観客から見えやすいようにつけて傾斜があったようだ。であれば、当時はこの表現は少なくとも英国ではメタファーではなく文字通りだったことになる。しかしながら、その後、舞台構造をギリシア・ローマ型——客席に傾斜をつけ、舞台は平坦——にもどるのが一般的になったようだ。それにより、舞台前方が downstage、舞台後方が upstage というこれまた奇妙な投射表現が生まれることになる。これは、例外的な「前は下」「後は上」のパタンであろう。
  - (12) この例 (drop one's voice) のみ瀬戸 (1995) のものではなく、説明の都合上筆者が独自に加えた。
  - (13) 佐藤 (1993: 175) は、注 (6) の見解に続けてさらに観察を進め、1979年当時の東京の交通標識等で、下向き矢印が前方を意味する場合もあることに言及する。

確かに、現在の道路標識にも下向き矢印を利用したものが少数だが存在する。例えば、案内標識の「方面および車線」、指示標識の「中央線」、規制標識の「路線バス等優先通行帯」等である。よって、「投射認識」には、「前は上」「後は下」の他に、「前は下」というパタンも含まれるのかもしれない。しかし、「前は下」の認識が反映する言語表現はほとんど見当たらない (注 (11) を参照)。また、論理的に想定できる「後は上」は、直観的には、認識としてすら成立しにくいかもしれない。



- (14) 「同領域写像」という表現に違和感を覚える向きもあろうが、趣旨としては、同一領域内における異質な下位領域間に写像関係が成立することを意図する。これは、投射表現のみならず、共感覚表現などにも当てはまる現象だろう。
- (15) 『多義ネット』は投射表現を意識しつつも、その記述の内実には一貫性がない。例えば、「価値自由」と「価値拘束」の区別を反映する形で独立の意義として記述する項目もあれば（例えば、upやdownなど）、区別しないものの投射表現を独立の意義として扱う項目もあったり（例えば、head, foot, bottomなど）、また、投射表現を独立の意義としてすら扱わない項目もある（例えば、topなど）。
- (16) 一見すると、「物価が上がる」ことに負の価値、「物価が下がる」ことに正の価値が感じられそうだが、繰り返しになるが、これは消費者側の庶民感覚に根ざすのだろう。しかし元来、「物価」という語には、固定的・絶対的な「価値」が意味として組み込まれているわけではない。
- (17) この点は、目標領域にもメタファーによらない内在的構造があることを認めたLakoff (1993) の Invariance Principleと一致するだろう。
- (18) 注 (17) と同様に、ここにも Invariance Principle にかなう状況が見てとれる。

## 引用文献

- Brugman, Claudia (1981) *The Story of Over: Polysemy, Semantics and the Structure of the Lexicon*. New York: Garland Press.
- 井上京子(1998)『もし「右」や「左」がなかったら』東京: 大修館書店.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George (1993) "The Contemporary Theory of Metaphor." In A. Ortony, ed. *Metaphor and Thought*. 2nd ed. 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lindner, Susan J. (1981) *A Lexico-Semantic Analysis of English Verb Particle Constructions with OUT and UP*. Ph. D. dissertation, San Diego: University of California.
- 佐藤信夫(1993)『レトリックの記号論』東京: 講談社.
- 瀬戸賢一(1995)『空間のレトリック』東京: 海鳴社.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
- 内川恵二〔編〕(2000)『視覚情報処理ハンドブック』日本視覚学会. 東京: 朝倉書店.
- Wierzbicka, Anna. (1996) *Semantics: Primes and Universals*. Oxford: Oxford University Press.

## 辞書・事典

- Cambridge International Dictionary of English*. 1st ed. 1995. [CIDE]
- Longman Advanced American Dictionary*. 2nd ed. 2007. [LAAD]
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 9th ed. 2009. [LDOCE]
- Macmillan English Dictionary*. 2nd ed. 2007. [Macmillan]
- Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 8th ed. 2010. [OALD]
- The New Encyclopaedia Britannica*. 15th ed. 1990. [NEB]
- The New Oxford Dictionary of English*. 1st ed. 1998. [NODE]
- 『英語多義ネットワーク辞典』初版. 2007. 瀬戸賢一 (編集主幹) 小学館. [多義ネット]

## コーパス・サーチエンジン

- The British National Corpus*. (<http://bnc.jkn21.com/>) [BNC]
- Google. (<http://www.google.co.jp/>) [Google]

On “Horizontal” Expressions Which Reflect Up-down Schema

— A Case Study of HORIZONTAL IS VERTICAL or FRONT IS UP / BACK IS DOWN Metaphors

YAMAZOE Shugo

Abstract

This article discusses slightly peculiar up-down metaphors which serve to structure from “vertical” to “horizontal” domain, some of whose instances are “an *up/ down* train” or “the *top/ bottom* of the road”. First of all, we survey a number of up-down metaphorical expressions in relation to the predominance of a vertical axis over a horizontal axis. Next, we review Lindner (1981) and Seto (1995) dealing with “horizontal” expressions which reflect up-down schema, and point out their essentials and problems. Above all, a close examination of these examples shows that the classification by Seto (1995) cannot be maintained. And finally, the article concludes with some observations on such intriguing up-down metaphors which designate “horizontality”.

Keywords: up-down metaphor, conceptual metaphor, metaphorical expressions, “Goal-Oriented” UP, “projection” cognition, “projection” expressions, evaluation, mapping between different domains, mapping between the same domains

(やまぞえ しゅうごう 札幌学院大学人文学部准教授 英語学専攻)